

目標に向かって真つまずく歩む



世界子ども図画コンテストで銀賞

狩野 雅暉さん 15歳  
下細井町

60の国と地域から2万7,840点の応募があった世界子ども図画コンテストで、絵画「豊穡への祈り」が銀賞に輝いた。

「応募するときは、賞をもらえるとは思っていませんでした。受賞が一番喜んでくれたのは母です。親孝行になったのならうれしいですね。周りからも声を掛けてもらおうようになり、受賞の喜びが込み上げてきました」

熱意を持って絵画に取り組む狩野さん。絵をはじめたきっかけは、苦手を克服しようという気持ちだった。

「幼稚園のころから絵が苦手でした。そのため小3のときに周りの勧めで、絵画教室に通い始めたんです。

続けるうちに楽しくなり、自然と得意なことになっていきました」

現在中学3年生。高校受験のための勉強や部活動など充実した毎日を送っている。さまざまなことに全力で取り組む原動力は、しっかりとした将来の夢だという。

「将来は医者になりたいと思っています。小さいころから医者にかかることが多く、病院が苦手でした。そんな自分だから親しみやすい医者になりたい。高校に入学したら美術部に入り、絵も頑張ります」

絵画の才能を努力で開花させた狩野さん。今後もその努力で夢をかなえ、より多くの人に笑顔をもたらす人になってほしい。

見たい

知りたい

伝え隊

今回のテーマ  
「ホタル」



夏の風物詩「ホタル」の時期がやってきました。暗闇の中をゆらゆらと舞うホタルの幻想的な光に、感動的な気持ちになるという人も多いのではないのでしょうか。

本市では、自治会などが中心となり、用水路を整備するなど、ホタルの保全活動を展開。きれいな水を守り、ホタルが住みやすい環境づくりを進めています。6月中旬になると、田口町のホタルの里や大胡ぐりりんふらわー牧場、みやぎふれあいの郷などで、水辺を舞う美しいホタルを見ることが出来ます。また市内の学校では、ホタルを飼育し、自然の大切さを学ぶ取り組みも行われています。

ホタルが光るのは、自分の存在を相手に知らせるためといわれています。オス

はメスにプロポーズをする際に強い光を連続して放つそうです。思いを光で伝えるなんて、とてもロマンチック。  
一生の大半を水中で過ごし、成虫の間はわずか10日間あまりのホタル。命の尊さやはかなさ、自然の大切さをわたしたちに教えてくれているのではないのでしょうか。ホタルが息できる美しい自然を次世代へと引き継いでいくことが、わたしたちの使命かもしれません。

みんなの声

近くの水路でホタルの生息地づくりをしています。恵まれた場所でないため管理が大変ですが、見に来た人たちの喜ぶ顔を見るとうれしいです。

（蘇原茂さん・国領町二丁目）  
子どもたちとホタルを見に行つた時、目を輝かせて喜んでくれたのが印象的です。ことしも見に行きたいです。

（有井佐知枝さん・上新田町）  
昔、家の近くの川辺で飛び交っていたホタルの姿が心に残っています。

（齋藤礼子さん・粕川町新屋）

このコーナーでは皆さんからのエピソードをお待ちしています。今回のテーマは「るなばあく」。7月4日(月)までに、住所・氏名・電話番号を記入し、市役所市政発信課「見たい知りたい伝え隊」係へハガキかEメール (shiseihassin@city.maebashi.gunma.jp) へ。

クローズアップ



地域のきずなづくりに尽力

4月から地域担当専門員が活躍しています。専門員は自治会や地域づくり協議会の会議などに積極的に参加し、地域と行政が一緒になって取り組む豊かな地域コミュニティづくりを支援します。地域づくりはきずなづくり。これからも地域に密着した活動を行っていきます。



熱いレースに響く大きな声援

6月2日から5日まで、グリーンドーム前橋で「高松宮記念杯競輪G1」を開催しました。国内トップクラスの選手が集まるレースを楽しむに、多くのファンが来場。一戦ごとに繰り広げられる熱いレース展開に、大きな声援が会場に響き渡りました。



新緑の赤城山でごみ拾い

6月30日(休)まで赤城山新緑&つつじウィークを開催中です。6月5日には赤城大沼や覚満淵のごみ拾いを実施。参加した約700人のボランティアは、新緑を楽しみながら湖畔や道路のごみを拾いました。ツツジが見ごろを迎える赤城山に、ぜひ、お出掛けください。



行政自治委員に市政を説明

5月30日、市民と行政を結ぶパイプ役、行政自治委員の事務連絡会議を総合福祉会館で開催しました。功労者表彰に続いて行われた会議では、高木市長が本年度の市政の概要について、市の担当者が当初予算や夏の節電対策などについて説明しました。